

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	18100007	研究期間	平成18年度～平成22年度
研究課題名	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁労文明の興亡	研究代表者 (所属・職)	安田 喜憲(国際日本文化研究センター・研究部・教授)

【平成21年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

研究代表者が提唱した年縞の分析に基づく高精度の環境史復元と、考古学・歴史学的調査とを組み合わせ、アジアの文明の興亡と気候変動の関係を明らかにしようとする本研究は、独創性に優れ、その学術的意義も高い。

1) 日本をはじめとしたアジア各地の湖底堆積物の年縞分析による気候変動等の解明、2) これと地理的にセットになった考古学・歴史学調査による文明史の解明という研究計画は、日本の秋田、エジプトなどにおいて良質な堆積物の採取に成功し、カンボジアのプンスナイ遺跡での考古学的発掘調査で多大な成果を上げるなど、当初目標に向けて順調に計画が遂行されている。さらに、本研究に関して研究代表者を中心に成果公表が活発な点、遺跡調査に関して、日本語、英語の調査報告に加え現地語での調査報告書が作成された点などは、高く評価できる。

今後は以下の点に留意して、計画通り成果を生み出すようこれまで以上の努力を期待する。まず、当初の主要な調査候補地であったインドのガンジス平原での調査が実施されていない点など、一部に研究の遅れが懸念される部分がある。本研究の調査対象域は極めて広範囲であり、さらにアンデスなど他の地域との比較の予定もある。今後の調査の優先順位や、各地域の成果の統合手法など十分に検討し、着実な研究の実施が望まれる。次に、年縞分析は本研究の中心的な部分である。分析に時間が必要であることは理解できるが、その成果公表がすみやかに終わることを期待したい。さらに、研究分担者、研究協力者等の入れ替わりがやや多い点が気になる。本研究では、さまざまな地域の多様な分野の成果を統合し、とりまとめることが今後必要である。そのためにも研究組織が十分に機能し、グループ全体として業績が上がるよう留意されたい。

【平成23年度 検証結果】

検証結果	<p>研究代表者が提唱している「年縞法による高精度気候変動によるアジアモンスーンの稲作漁労文明の興亡」は学際的研究として学術的意義が高く、またその研究成果をきめ細かく公表し、国際社会にも良く発信している。発掘調査として、初年度のカンボジア、プンスナイ遺跡の調査をはじめとし、平成21年度まではその整理・編年・環境調査・人骨分析を行い、十分な研究成果を挙げている。しかしながら、下記のとおり当初の計画から多くの変更がなされている。</p> <p>研究目的は年縞の分析が主体で、モンスーンアジアの気候変動・森林破壊・それらの地域差や時間差・過去の地震洪水等の発生日代というテーマを挙げており、研究計画時点では5箇所のボーリング調査が予定されていたものの、実際にはH18年度の秋田県目潟とH19年度のバリ島の火山湖及びH20年度エジプトカルーン湖がなされたのみである。</p>
B	